

実践2

子どもにとっての「個別最適な学びと協働的な学び」

——「この本、おすすめします」(五年)——

「個別最適な学びと協働的な学び」を実現するために、最も大切なことは「教師が子どもに教える」という考えをリセットすることである。そのうえで、子どもの思いを尊重し、子どもの「やりたい」を引き出すことが「個別最適な学び」につながると考える。「やりたい」に向かっていく中で、子どもは自然に「協働的に」学んでいくものである。ときにそうでない子がいたら、「協働的な学び」の価値を伝えればよい。教師は、委ね、支え、寄り添うような存在になるべきだと私は思う。



推薦したいものの情報を集める



困ったときに交流できるよう、広いスペースに集まって作業する

■単元計画(全6時間)

1時

- ・推薦文について、どんな特性があるのかを理解する。
- ・その上で自分の「やりたい」を広げる。

ポイント①

2時

- ・どのように学ぶのか、自分の学習計画を立てる。
- ・学習計画を擦り合わせる。

ポイント②

※左記は児童の活動の一部を紹介するものである。

3時～5時

- ・推薦文そのものをインターネットで調べ、詳しく知ってから書く。
- ・まず書いてから(ノート、パソコン等、何に書くのかも自分で選ぶ)友達と共有を図る。(直接話す、ネットのトークルームを使う等)
- ・推薦するものについて情報を集める。(教科書の引用の学習を生かして)
- ・パソコンで構成メモを作成し、画用紙に清書する。

ポイント③

6時

- ・推薦したい相手からフィードバックをもらう。(学校外の方からももらうことも効果的である)
- ・学びを振り返る。

ポイント④

ポイント① ワクワクを高める

教科書のモデル文等を使用して、推薦文がどういうものか大体の理解ができるようにする。そして、「何を」「誰に」「何のために」といった「自分のやりたい」を広げていく。

ポイント② 自分の考えと他者の考えを擦り合わせる価値

学習計画を立てるうえでの理想は、子どもが自分に合った計画を立て、自分の「やりたい」に向かっていくことだが、「一人でやりたい」「友達と相談したい」、「三時間書きたい」「書くのは二時間で十分」と、個々人の「やりたい」は異なる。これを実現するには、教科の再編や標準時数の変更が必要となってしまふ。そこで、個々の「やりたい」を出し合って、他者の「やりたい」を受け入れる場を設け、合意形成を図っていくことに価値がある。



子どもA 私は、まずネットで情報収集をして、おすすめの理由に説得力をもたせようと思った。

子どもB それはいいね。でもぼくはAさんと相談したいことがあるから、そのときは聞いてもいい？

子どもA もちろんいいよ。基本は一人でやっているけれど、声をかけてくれたら一緒に話せるよ。

ポイント③ 委ねること・問いかけること・主観的な感想を伝えること

子どもたちは、ここまで「やりたい」を高めているはずである。だからこそ、ここからの活動は子どもたちに委ねていく。つまり、自分で立てた計画をもとに学んでいくということになる。

個々に異なる活動が始まったら、教師は「どんなことをしているのか。」「なぜそれをしていいのか。」「この後どうするつもりか。」等の問いかけを行って、学びを自覚できるようにしたり、自己決定を促したりする。加えて、主観的な感想を伝えることで、褒めること以上に自信をもてるようにしていく。



教師 楽しそうなことをやっているね。今は何をしているの。

子ども ○○○のおもしろさを書いているところです。

教師 なぜ、○○のおもしろさを書くと思ったの。

子ども まずは自分がおもしろいと思うところを整理しないと、他の人に伝えられないからです。

ポイント④ 立ち止まって振り返り、前を向いて歩き出す

第6時は、児童の立てた計画ではない。これまでの自分をなるべく客観的に振り返り、そこから次につながる何かを見いだす。この価値に気づいてほしいという教師の願いから、子どもと教師で合意形成をはかりながら設定する。押し付けるのではなく、納得して取り組めるようにすることで、価値に気づくことができると考える。



埼玉大学教育学部
附属小学校
吉野 竜一